

記念艦三笠と東郷元帥の銅像



マーシャル方面遺族会
(旧クェセリン方面戦歿者慰族会)
〒103 東京都中央区
日本橋人形町 1-8-2
電話 03-3661-8760
振替口座東京 0-93487 番
編集兼発行人 佐藤宗丕

平成 四 年 度

慰 霊 祭 総 会 直 会 の 御 案 内

会 長 佐 藤 宗 丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお知らせ合いの方々をお誘い合せ御参集下さい。

日 時 平成四年三月二十九日(日)

午前九時集合 靖国神社参集所前

慰 霊 祭 午前十時 昇殿 参拝

総 会 午前十一時 靖国会館二階

議 題 諸 報 告 ・ 会 務 計 画 ・ 予 算

本号に同封した私製はがきには、慰霊祭に参加しない方も必ず全部の欄に記入して二月末日迄に御投函下さい。

会員名簿訂正に関係ある事項は特に正確にお書き下さい。「環礁座談会」(15頁参照)に参加を希望される方や霊砂御入用の方は、はがきの通信欄にお書き下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、代金を添えて二月末日迄にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋で、一泊二食付一人七、六二二円の特別割引(30%)価格です。

申込み後の取消しや変更は直ちに左記に電話して下さい。

〒102 千代田区九段南一―六―五

九段会館 宿泊部(電話03―三二二六―一五五二二)

その時は本会にも電話でお知らせ下さい。

◎第二三回直会(なごらい)旅行会を次の通り行います。人数に限りがありますので早目にお申込み下さい。

順路 靖国神社―横須賀(記念艦三笠)―油壺(泊)―鎌倉―江の島(中食)―大船駅―東京駅

(以下 16 頁へ)

目 次

平成四年慰霊祭総会直会の御案内 会長 佐藤 宗丕	1
歴史を大切に ……三笠保存会副会長 板谷 隆一	2
記念艦三笠を見学された 天皇・皇后両陛下	2
国民自重の精神(一) ……小泉 信三	3
北満からマーシャルへ(4) ……秋元 輝夫	4
編集部さんへ……ミニ情報 ……青木 謹次	6
厚生省の現地慰霊巡拝 遙かな父の思い出 ……荒木 常子	7
戦地からの便り 上田 文子	8
ウオッセ島の最新情報 兼高かおる 憩いの地 ……キリバス	10
杏き雲の下で(一) タラワに合気道道場完成	13
名簿訂正 ……寄付者芳名	14
座談会の予告 ……本部だより	15
故木下甫様の御逝去を悼む ……紅 椿	15
……谷沢 英子	15

歴史を大切に

三笠保存会副会長 板谷隆一

平成二年は、東郷大将の率いた我が連合艦隊が、ロジェスト・ウエンスキ中將の指揮するロシアのバルチック艦隊を対馬海峡に迎え撃ち圧倒的な大勝利を得てから丁度八十五年目に当たります。また、過ぐる第二次大戦の終了から四十五年を経過したことに異なります。したがって、日露の戦いに参加した方はもちろんのこと、国内において子供心にも日本海海戦の大勝利に欣喜雀躍した覚えのある人もほとんど鬼籍に入られて、生存されている方は



極く少数ではないかと思えます。

一方、歴史の教科書に基づき、日露戦争について正規に教育を受けた人も、若い方でもう五十五歳前後になったことでしょう。これ以降の若い人々は、いわゆる戦後教育を受けているので、日本の近代史には全然触れていないか、あるいは、日露戦争があたかも日本の侵略戦争であったかの如く教えられてきていると思えます。

この戦争はもともと、ロシアが極東の制覇をめざして、その野望達成のために、満州（中国の東北三省）に軍隊を入れ利権を獲得し、また、日本の海軍を目標とした強力な極東艦隊を旅順・ウラジオストクに配備し、あまつ

記念艦三笠を見学された

天皇・皇后両陛下

戦後荒廃の極にあった三笠が内外の有識者の努力によって今のようになされた直後の、昭和三十六年六月二十六日、時の皇太子殿下と美智子妃殿下は、山梨勝之進元学習院長（元海軍大將）始め関係者の御案内で艦内を御熱心に御見学遊ばされました。

さえ朝鮮半島にも手を伸ばし始めて、日本の存立に重大な脅威を与えたことに起因しているものであります。日本は自衛のため国の興亡を賭けて戦ったものであります。イギリスは日本の立場を支持し、日英同盟を結んで協力し、アメリカも日本には好意的中立を保ち、戦費の調達にも協力し、また、戦争の終結和平への仲介にその労を惜しまなかったし、清国（現在の中国）でさえ日本の満州兵力展開に好意的であったことによっても立証できるどころであります。

日本海海戦より丁度百年前、一八〇五年十月二十一日、ネルソン提督の率いるイギリス艦隊は、ビールヌービス提督の率いるフランス艦隊をトラファルガル沖において撃破大勝を博し、これによってナポレオン一世のイギリス本土への上陸制覇の夢を完全に水泡に帰せしめ、祖国の危急を救うとともに、その後の繁栄の基礎を築いたものであります。イギリス人は、ネルソン提督の功績をたたえ、ロンドンにトラファルガル広場を設け彼の像を建て、当時の旗艦であったビクトリー号をポーツマス軍港に記念艦として保存し、一般の観覧に供しています。聞くところによれば、年間数十万人に及ぶ青少年が全土から集って見に来るといいます。もちろん強制されたものではなく、親が子に伝え、大人が子供に語り、先生が生徒に教えて、百八十年間続いてき

ていることになりました。昨今よくイギリスは斜陽国家だとか、その国民はイギリス病を患っているというのを耳にしますが、この事象をみるかぎりにおいては、イギリス魂はなお健在であり、衰亡するようなことは絶対ないという気がします。

ひるがえって日本の現状はどうでしょうか。経済大国になったと豪語していますが、今もなお敗戦ボケの症状から脱し切れず、自虐の歴史観に自らを拘束したままであり、八十五年前、日本の危難を救ってくれた東郷大将の名前も知らない人が増え、あるいは、当時の連合艦隊の旗艦であった三笠が横須賀に記念艦として保存されていることにも関心を示さない状況になりつつあるようです。ただ、平成四年度からようやく教科書に東郷大将の名前が採り上げられると聞いて、これこそ事態改善の一步であると喜んでいきます。私にはなにも日本の歴史をことごとく美化せよと言うつもりは毛頭ありません。ただイギリス国民に見習ってでも、是を是とし、非を非とした正しい歴史を学び、なお、これを大切にし、また、日本人たるの誇りと伝統を失うことのないように是非して欲しいものだと思っています。

(註) 本稿は、三笠保存会の会報「みかさ」三号(平成二年五月二十七日発行)より転載させていただきました。

国民自重の精神(一)

小泉 信三

(註) 栄光の記念艦三笠は、敗戦の後遺症で見るも無残に荒れ果てたが、内外の有識者の呼びかけで、復元保存の氣運が高まってきた。そのおひとり小泉先生の昭和三十三年頃の講演の要旨を掲載します。

かねての宿題でありました三笠の復元保存の問題がようやく緒につきまして、ここで皆さんと御一緒に憂いを感じて、ここで皆さんと御一緒に憂いを感じておりました問題についてお話をする機会ができましたとは何よりの仕合せと存じます。この問題につきましては、皆それぞれ銘々に一人々々で心の中に済まないことだという感じを持っておりながら、志を同じゅうする人々と話し合う機会もないために、銘々自分の心のみそれを抱いておりましたことが、こういう会ができました。御一緒に語り合い、御一緒に心配することができるようになりましたこと何よりの仕合せと思います。

るものに対しては卑屈となるということはいづれも避けがたいことであります。従って、一国民が正しい自重の精神を堅持することは、ひとり自国のために他国のあなどりを防ぐのみでなく、国民と国民、世界の国民と国民、国と国との関係を正常な健全なものにする上において欠くべからざる要件であると思えます。まことにやむを得ない次第でありましたが、日本国民の自重の精神は敗戦によって崩れました。他国の武力に屈するのやむなきに至りました日本人は、その国民としての誇りを失い、心の友を失って頽廃に陥ったことはごらんの通りであります。すべての道徳的努力を無意味なものとしてあざけるという思想、ひたすらに官能の満足を追いかけるという傾向、またさらに、何ものかにこびるような気持から、しきりに日本及び日本人をあなどりあざける風潮が起つてきたことは御承知の通りであります。ことに多少知識があつて時世の動きに対して神経が鋭敏である者の間に、ここにこの傾向が顕著であつて、その一派の人々の書いた歴史などを見れば、いかに日本人はつまらない国民であるかということを説くのに努力しておるかのごとくに見えるのであります。

軍艦三笠の現状は、偏に自重を失つた国民の精神状態を示すものと思えます。自尊自重の精神を失つた国民は、日本国民として忘れてはならない三笠を現在のような状態に陥るがままに陥らせ、また、国民にとつてこれほど尊い記念物である三笠が今のような状態に放置されるという事実がさらにまた原因となつて人心を一そうの頽廃に導くということになつて現在に至つたのであります。すなわち A は B の原因となり、B がまた A の原因となるという悪循環の間に、国民にとつて代えがたい記念物である三笠は風雨と海水に朽ち果てていこうとしておたのであります。幸いにしてこのたびのこの三笠保存会の成立によつてこの悪循環が断ち切られるようになりましたのはまことに申しようもない喜びであります。三笠保存のために数億の金を要するということであつて、その金は決して少額とは言ふことはできませんけれども、その金によつてわれわれががなにい得るものは何か、すなわち日本国民自重の精神であるといつたならば、だれもこれが高いというものはないはずであります。私はここで単に国防のこのみを言うのではなくして、自尊自重の精神なき国民はすべて高い精神活動の落伍者たらざるを得ないのであります。

を設け、また、ポーツマスの軍港にビクトリーを保存するという英国国民は、他面においては、議会デモクラシーを確立した氣力ある国民である。また、タンネンベルヒの殲滅戦を誇るドイツ国民はまたあのドイツの哲学、科学及び芸術を生んだ国民であります。今日のソ連人はわれわれとは政体も思想も違うかもしれませんが、しかも今日のソ連人がスターリングラードの攻防戦について誇りを持って語る氣持はわれわれに十分わかるのであります。そうしてよくスターリングラードを守りおせたソ連人はまた同時にスプートニクの打上げにも成功した国民であることは認めなければならぬ。いかなる問題につきましてもわれわれはよくこのことをおもうべきであつて、それにつけても思い出されるのは、五十年前の日本海海戦の勝利のそのときの記憶であります。日本海海戦の勝利が入りましたのは、今考えると実にのんきな話で五月二十九日であります。最近の古い新聞を調べてみますと、二十七、八日の戦鬨の勝報が東京のわれわれに入りましたのは二十九日の夕方であります。私は慶応の学生で十七才の少年でありましたが、運動場に出て友達と競技の練習をしておりました。東郷司令長官の第一の公報にありますように、「天気晴朗なれども浪高し」ということでありましたが、二日後の東京は非常に快

く晴れた日でありました。その夕方慶応の運動場に時事新報の号外がきて、それを皆で喜んでわけでありました。よく私が目を疑うというのを申しますけれども、この新聞号外を見たときには、われわれは全くわが目を疑ったのであって、そこに書いてあることの意味がちよっとわからぬほどに意外の大戦果でありました。しばらくそれを繰り返して読んでおりましたが、次の瞬間にはわれわれはそこに書いてあることが事実であるということを知って、その瞬間に数十人の青年は、何かわけのわからぬ叫び声をあげて踊り狂っておりました。私もその一人であったと思います。手の舞い足の踏む所を知らぬということを文章にはよく言いますけれども、その日のわれわれがまさにそれであって、日本の国民の歴史で喜と光栄の瞬間というようなものを数えれば、この日を第一に数えなければならぬと思います。そしてやや時がたつて冷静を取り戻すと、冷静になればなるほどいかに信じがたいほどの大きい勝利であるかということがだんだんにわかって参りました。

ロシアのバルチック艦隊の遠征が決されたのは前年の五月ということですが、準備の方に時がかかってロジェストウェンスキー司令長官麾下の大艦隊が軍港のリバウを出ましたのは十月ということでありました。

その十月からわれわれの日々という

ものは実に重苦しいものでありました。バルチック艦隊自身の航海も決して平穩ではなく、いろいろの出来事や事件や災害に遭って、進行は遅々としておりましたけれども、ともかくも希望峰を回航したということは明らかであり、翌年の五月になって、カムラン湾に入ったということは一般のわれわれにも知らされておりました。それから日本人の日々というものは実に想像しても苦しい気持のする日々でありました。まあバルチック艦隊の戦力というような専門的のことはもちろんわれわれにわかりませんが、しかしとにかく強大なる大艦隊であるということは争いがたい。そしてその年の一月に幸い旅順は開城いたしました。が、日本の主力艦の初瀬、八島がなくなつたということは、これはやはり一般国民は知っておりました。あゝのとき海軍の方は御記憶ないかも知れませんが、一般には五月何日かに沈没したときは、初瀬の沈没だけが発表されて、八島は伏せられておりました。けれども外国の新聞にはそれが出ておりますために、ロンドン、タイムスなど読んでいる者は、それをやがて知って、そしていつか国民ももうやむを得ないことだと観念するような気持になっておりました。

(以下次号)

北満からマーシャルへ (4)

Ⅱ 或る陸軍部隊の苦闘Ⅱ

秋元 輝夫

この間、敵からは砲爆撃を受け米麦は愚か、満足な食糧を得られない極限の生活を続けながらも、若い現役の戦士達は軍規を守り酷寒の満州荒野で鍛え上げた腕を、敵に対し一発の弾をも撃つことなく銃剣の突撃もならず或る者は敵の艦砲射撃に、或る者は上空からの銃爆撃により又、不幸病に冒されながらも、良く己が陣地を守り通し遂に力尽き南冥の孤島で祖国の父母兄弟との語らいを夢の中に思い浮かべながら斃れて逝つた者も少なくなかった。

機動第二大隊第六中隊

マロエラップ島上陸

機動第二大隊「駆三一三二部隊」を乗せた輸送船但馬丸がクエゼリン島に向かう途中、マロエラップ島防備が発せられた第六中隊に対し送別の訓示が行なわれた。赤い長靴を履いた部隊長殿の饒別の言葉は切々として胸を打つものがあつた。特に最後に「悪疫猖獗の地なれば健康に注意し、立派に御奉公出来ることを祈る」と結ばれた。

そして第六中隊(中隊長・佐藤政雄陸軍大尉)に今村信夫軍医中尉の指揮する衛生隊の一部に担架隊を配属して

(中隊長以下二〇九名)昭和十九年一月十一日、護衛の駆逐艦「潮」に移乗

一月十二日夕刻、マロエラップ環礁タ

ロア島に到着し揚陸作業中、敵B二五爆撃機六機の低空攻撃を受け戦死傷者並びに護衛艦に損傷を受ける。敵機の奇襲を受けた「潮」は急遽クエゼリン島に帰投したる為、我が隊と交代予定であった南洋第一支隊第二大隊第七中隊(中隊長・中西中尉)、一八〇名はヤルト島第二大隊に復帰出来ず結局終戦迄同島に留る。

当時、海上機動第一旅団の輸送護衛に当たっていた駆逐艦「潮」艦長・荒木正臣氏は当時の様子を「駆逐艦・潮の思い出」の中でこう語っている。

「……この兵団は北満白城子付近から南下した精銳部隊で、トラック島からマーシャル諸島の環礁に輸送配備されたのですが雄図空しく敵の反攻によつて、その大部分が十九年二月下旬迄に玉砕してしまいました。潮は十九年一月中旬、右兵団司令部の乗船した小型輸送船をブラウン(エニウエトク島)からクエゼリン島迄、護衛した後陸兵一ヶ中隊を乗せてマーシャルの東端マロエラップ環礁へ輸送し急遽揚陸中、B二五、六機の超低空爆撃を受け艦橋前の二連装機銃を銃員三名と共に跡形もなく吹き飛ばされた。……」

この破孔の下線が二個とも僅かに吃水線上であった為、沈没を免れた。舵

機故障の爲、人力操舵で狭い環礁の水道を出て毛布、丸太等で穴を塞いだ。破孔に水圧をかけないように十六節で航行し、帰途軍命によりクェゼリン島に立ち寄り南方離島から陸軍少尉が奉持して宮城へ奉還する真新しい軍旗一旒及び護衛の下士官数名を乗せトラック島に帰還し応急処置をした」

昭和十九年一月三十日は

長い一日でした

一月三十日(日)早朝午前五時二十五分、空襲を知らせる軽機関銃の発射音が陸北、陸南の見張所から響き渡り期を失せず零戦全機十八機が、滑走路を蹴って晝の空に舞い上り上空で迎撃態勢に入る。先ず第一波、敵七機が本島上空に潜入、忽ち我が零戦と空中戦に入る。南西洋上でドドド……と格闘が始まる。我が方の武運を祈る。やがて全機無事帰還。弾薬、燃料の補給整備を急いでいた。午前五時四十五分

第二波の来襲を告げる警報が鳴り渡り、空を覆う敵戦爆連合五十余機が来襲、我が零戦も飛び立った。この空襲で我が方の零戦、一式陸攻は殆ど壊滅してしまに残った一、二機が戦い終わって本島に帰って来たが、滑走路は無数の爆撃弾痕により着陸不能となり北方離島方面に飛び去り不時着せざるを得なかった。午前八時三十分、西方八十里に空母を含む敵艦隊を発見、午前九時、三十一機、そして午後に入って敵戦爆連合五十余機等、数次の連続来

襲、加えて巡洋艦、駆逐艦の砲撃が始まり本島上空に観測機を飛ばし、夜に入って照明弾を打ち上げ悠々砲撃を加えて来る。愈明朝は敵上陸の公算大と予測され中隊長の命により、各隊は定められた内海、外海阻止線の配備に就く。北満の広野に鍛えた腕の見せ所到来と、戦士達の士気益々旺盛、一死以て君恩に報いるべく一同下着類を着替え、身の回りを整理して配置に就いた。しかし夜が明けて凝視する礁湖には敵影は見られなかった。

翌三十一日(月)夕刻迄に敵機延べ四百機、巡洋艦、駆逐艦十余隻の来攻により制海、制空権は敵の手に委ねざるを得ない最悪の状況下に入った。

二月五日(土)夜に入り我が陸攻二機飛来、飛行搭乗員十七名を收容し月明かりの夜空に飛び立ち西方に去って行った。これが最後の友軍機の飛来となった。一月三十日以来の敵の猛砲爆撃により海軍の油槽タンク、弾薬庫、糧秣庫等の殆どの建物を喪失する。殊に糧秣は平食の四十日分を残すのみとなり最も憂慮すべき状況に至った事を耳にする。戦況菜観を許さざる状況下で残存糧食の食ひ延ばし策として粥、雑炊、重湯と次第に米の粒数が少なくなり、やがて全く絶えてしまった。潜水艦による糧秣輸送の話聞いたが総ては駄目のようであった。それでも望みは捨てずに奇跡を待ち続けた。八月に入り食糧開発隊が編成され各隊から

それぞれ割り当てられた環礁離島へ派遣され第六中隊はマロエラップ環礁主実採取、南瓜、サツマイモ栽培、漁労製塩に従事し大いに実績を上げた。このような自活にも限度があり十九年十一月頃から栄養失調症に罹る者が多く、毎月夥しい戦死者が出る悲惨な状態となる。

昭和二十年三、四月頃は梅雨季のようになり冷たい雨の日が多く天候不順の日が続ぎ、農園の収穫物も減り従って体力の消耗も激しく、思うように海にも入れず戦士達は我が身を顧みず肉親の安否を気遣い、そして「故郷の山から湧き出る清水」と「白い銀飯を」と、叶えられない最高の贅沢を言いながら従容と総てを燃やし尽くし斃れて逝った。辛うじて生き残った者も杖を手にした。辛うじて生き残った者も杖を手にした。裸足で歩く状態であった。

終戦

八月十五日(水)いつもと変わりなく朝から強い太陽が荒廃しきったウオッゼ島の陣地を照らしていた。午後三時頃と記憶する。「オーストラリアのラジオ放送が、日本の敗戦と降伏を知らせております」と服部、丸山両曹長の二人が報告に飛び込んで来る。やがてポツダム宣言受諾を受信する。

八月二十二日(水)戦闘停止の命令を受領する。戦いは総べて終わったのだ。太平洋の彼方に沈む大きく真つ赤な太陽を眺め、内海の浜辺に静かに打

ち寄せる潮の音を聞きながら……北満の果てから、はるばる何の為に我々は、このマーシャル群島に来たのであるるか……日本と米国の戦力の差、大本營の作戦の手違い、と申ししまえはそれまでであるが。

九月二十五日(火)と記憶する。病院船氷川丸にて負傷者、病人の送還をするとの連絡を受ける。体力のある者のみ残り、傷病戦士を一日も早く内地に送還を依頼する。

十月二十日(土)愈生存者の内地帰還の日である。日本から迎えの海防艦「あまぎ」に日焼けした元気な海軍諸兄に助けられ移乗を終わった。真つ赤な太陽を背に艦はトートン水道にかかる。……共に同じ釜の飯を食べ合ってきた多数の戦没戦友を残して去らなければならぬ……。「戦友諸兄、どうか靖らかに御眠り下さい……生きて帰ったらいつの日か必ず墓参に参ります」……十月二十七日(土)早朝遙か遠く洋上に浮かぶ富士の峰を眺めながら午後浦賀港に上陸、重い足を引き摺りながら横須賀重砲隊に辿り着く。……十月三十一日(水)部隊を解散、隊員一同は、それぞれ懐しい故郷に向かって別れて行った。

(「北満からマーシャルへ」終わり)

(注・紙面の都合で一部割愛させていた
だきました)

編集部さんへ ミニ情報

青木 謹次

マリーシャル方面遺族会の会員は皆さん多士済済、夫々の場所ですっかり生きておられるのは心強い限りです。

今日は、当県の山田正三さん(弟さんがクエゼリンで戦死)のこの頃の活躍ぶりを当地「新潟日報」の記事を拝借して御披露します。

△平成三年二月十九日▽

「文化村」復活に意欲を燃やす

初代村史編さん委員長

山田 正三さん(71歳)



*文化村、復活に意欲を燃やす
初代村史編さん委員長
山田 正三さん
—中蒲横越村木津・71歳—

「完成予定は十年後。気の遠くなるような話ですよ」。中蒲横越村が、十年後の村制施行百周年に合わせて、初めて取り組む村史編さん事業の初代編さん委員長を務める。昭和十七年、新潟師範学校を卒業、同村をはじめ、新津、五泉市の小中学校で教鞭を執った。

五十五年、退職と同時に「友だちづくりも兼ねて、ものを学ぶ会を作ろう」

と玉鉾(ほこ)会を結成。年数回講演会を開いたり、研修旅行に出掛けたりと活発な活動を続けている。山田さんの依頼に応じて壇上にたった講師は自治体の元首長や第一線で活躍中の研究者ら二十三人。発足時五人だった会員も九十人を数え、公民館顔負けの人氣サークルになっている。

二千冊を超す蔵書に囲まれて、静かに話す山田さんは「本を読むのが文化の基本」と、同村旧小杉小学校在職中に読書会「あすなろ」をつくった。三十年たった今も続いており、十数人の会員とともに月一、二冊のペースで読んだ本は三百五十冊にのぼる。

地元出身の民族学者小林存をしのぶ「存徳会」や、石川啄木に親しむ会にも加わるなど、その知識欲は衰えを知らない。その傍らで四十八年から自費出版を続けてきた「生きる模索の灯り」と題したエッセー集は十四集を数える。「家内にあまり手を広げるなど言われてますよ」と苦笑する。

十年がかりの編さん事業は史料収集が始まったばかり。石川達三、川端康成、渡辺淳一などを愛読する山田さんは「私自身難解なものより、一度読んですらすと頭に入ってくるようなものが好きなんです。史実に忠実に詳しいのはもちろん、文章作法にも気をつけて親しみやすく、読みやすいものを作りたい」と意欲を燃やしている。

△昭和五十八年十一月十日▽
読み上げた文庫本二五〇冊
ペース崩さず月一冊
23年の成果認められる

県読書推進運動協議会が表彰

中蒲横越村小杉の読書サークル「あすなろ」がこのほど、優良読書グループとして、県読書推進運動協議会表彰を受けた。同サークルは昭和三十五年以來二十三年間、毎月一冊の文庫本を読み続けている。同協議会では今年から、秋の読書週間にちなんで表彰を行うことにし選考を進めていた。

同村公民館の推薦を受けた同サークルは「地味な活動ながら二十三年間、二百五十冊を読み上げた努力」(青柳昭一県立新潟図書館長)が評価された。

同サークルは三十五年、旧小杉小学校で教鞭を執っていた同村木津の山田正三さん(六二)の呼びかけでPTA会員など部落の読書好き八人で始めた。現在は四十代の主婦から山田さんまで十一人、このうち八人は女性。今も村で唯一の読書会だ。

中川与一の「天の夕顔」を取り上げた第一回以来、今月の向田邦子「寺内貫太郎一家」まで、これまで読んだ本は二百五十冊。本の選定は「残念ながら私が選ぶことが多い」(山田さん)。

初期の志賀直哉、有島武郎などから「問題点を多く含み、さまざまな読後

感を期待して」(同)石川達三、松本清張、最近は女性会員に受けた瀬戸内晴美、渡辺淳一、田辺聖子らが目立つ。すべて文庫本に限っているが、最近の文庫本出版ブームに山田さんはうれい悲鳴を上げる。

小杉地区は戸数二百一戸、千四人。兼業農家が多く主婦の仕事は大変だが、どんな農繁期でも読み上げてくれる人が多い。またその人なりの体験を交えた感想を述べ合ったり、村の出来事や世間話を語り合うのも楽しみとか。サークルを通じて、家族で本を読むようになった家も多い。会員の一人、小船戸タカさん(五九)は「山田先生の世話になり続けていつの間にか二十三年が過ぎたような気がします。若い人にも入会してもらい、いろいろな話を聞いてみたい」と話している。

厚生省の

現地慰霊巡拝

厚生省の平成三年度現地慰霊巡拝(本会関係地域)は次のように行われます。目的を充分達して全員無事に帰国されることを祈りいたします。

一、期日 平成四年三月一日〜八日
二、行先 マジユロ、クエゼリン

ルオット(ロイ・ナムル)

ブラウン(エニウエトク)ブラウン環礁は、今回が初めての集団慰霊で、戦没英霊のお喜びが察せられます。

遙かな父の想い出

東京 荒木 常子

マーシャルへは、過去二度訪れる機会がありました。最も、この足で、その土を踏みしめたいと願うブラウンには、なかなかそのチャンスが無く、やっと今年（三年八月）にその思いが果せると喜んでいましたのも束の間、又々半年程先に延びてしまったという事で、張りつめた気分が萎えてしまいました。しかしブラウン関係の一部の方々での座談会が行われ、同じ思いの方々が身近におられる事だけでも心強く必ず実施出来るようにしたいと、願っております。



父は海軍の技官として、私の生れる以前より一年の半分ほどは旧満州方面から、南はトラック、パラオ、ポナペ、ヤップ、等々南方の島々に出掛けておりました。物心つく頃よりアルバムなどで椰子の葉繁る南洋の島の様子は見聞きしており、私にとって懐しい、親しい響きを持つ所でした。その南洋

が父の終焉の地になろうとは夢にも考えないことであります。

昭和十五年、私が女学校に入学したころより父は中国の上海に駐在しており、二年ぶりの十七年七月にやっと帰国したものの、私の学期試験の最中でゆっくり話も交わす暇もないまま、一週間程在宅した後、毎日、出勤していた横須賀より、ある日突然、何の予告もなく、従ってそれなりの別れの言葉も無く出航してしまいました。出航は、恐らく機密裡に突然行われたのでしよう。

その二日程前、当時としては一寸モダンな黒革の小型トランクを持って出かけましたが、夏休みに私が学校の臨海学校で油壺へ出かける時使う様にと云って次の日それを空にして持帰ってくれました。そのトランクは今では金具も錆びついて使用には耐えられませんが、唯一の想い出ある形見として引越しの時も手離す事が出来ず大切に保存しております。

それからは便りも余りなく、そのうちこちらから送った小包がそのままで戻って来るようになって、不安なおもいではおりましたが正式な公報より何ヶ月か前に上司の方より、別のルートで戦死を知りました。

一年の半分を留守にしていたせいもあったのでしよう。只でさえ子供好きであった父からは今考えてみても倍、いやそれ以上に濃縮された愛情を受け

ていたように思います。小学校のころ上海や大連あたりより自分で描いた人物や、風景の絵葉書がよく届きました。が、内容は、よく勉強するように、本を沢山読みなさい、夜、寝る前に歯を磨くこと、余りお菓子を食べすぎぬようにとか、昭和の初め頃のことですが現代にもそのまま通じます。しかしあまりに堅すぎて、子供には今一つピンと来なかったように覚えております。

まだ今のように女性の教育問題がさほど重視されていなかった私の小さい頃から、これからの女性は大学くらいいかななくては、男の人に負けない様な仕事が出来なければならない、と何時も聞かされ、子供心にそれが大変な重荷になって、時には真剣に悩んだ事もありました。しかし運よく合格できた喜びも父の戦死の一足後れで、一番知らせたかった父の耳にはとうとう届かず終いになりました。

そして終戦。父の死で収入の道の突然断たれてしまった事と、戦後の経済の混乱でとても学問を続ける様な状態ではなくなり、心ならずも中退して働

かざるを得ませんでした。自分があれほど望んでいたことが中断されたことを父は天国でどのような思いで見ていることだろうと、私は残念なおもいをのまま永遠に遠くへ旅立ってしまった父の、死を前にどのよな思いで故国の事を、家族の事を思ったであろうと考えますと、父の最期の島に是非この足で立って、この永い年月、語りたくても伝えられなかったこと、また父亡きあと九十歳近い姑と学生だった私を抱えて、頑張り通した亡き母の話をしみじみとして来たいと念願しております。

ハルピンからのながき

常子さんお身体はお丈夫ですか。もうすぐ学校も暑中休暇になります。海へも行かれませぬね。いまにお父様が連れて行つてあげませう。海に行かないでも家に居ても毎日々々ラジオ体操をして其の後で水で身体中をふくと身の為によいのです。どうか今年の夏の内だけでもやつてごらん下さい。それから夜寝る前に歯を磨ぐことをお忘れずにやして下さい。常子さん位の時からいつも歯を磨いて寝る様にしますと、おとなになつてもお口の息がくさかったり歯ぐきから血やうみの出る事もなく白い美しい歯の別嬪さんになります。お身を大切に。



戦地からの便り

神奈川 上 田 文 子

兄の善三郎は海軍工廠に勤めていたが、昭和十八年八月に満洲に出征し、後でブラウン島に移動し、十九年二月に玉碎しました。二十六歳でした。(第一信) 面会に来た人に依託したものでらしく封筒の裏の差出人は女性名でした。書いた日は18・9・25。



お母様 文字 種々忙しい日が続いで大変でした

お蔭様で無事入隊致しました 門前迄 伯父様に来て頂きました後 面会する心算で居りましたが 機会を失してお会いする事が出来ず 日用品が手に入らず 若干困りました

こうして無事入隊してみると過ぎた二三日有りし事々が種々想い出されますお別れの言葉を満足にせず別れて来たのが若干心残りです 文字を叱ったり大声で人様に挨拶する事はどんなに丁寧に度重ねても言えるのですが 嬉しく母様や文子に挨拶し様と思うと胸

にこみ上げてくるものを感じ 又お母様にそのような様子が見えるので つい言わなくても解つてくれる 元気で出掛ければそれで良い 出掛けに涙は不吉なものと思つて居りました 其れ故 不実な奴 親の苦勞も知らずとお

思ひになった事と思ひます 此のお手紙でお詫び申し上げます これから先御苦勞が一層益す事です お年寄りのお母様故 誠にお気の毒に想ひます 此れも御国の為です 今のお母様の苦勞はやがて太平の御代に成れば幾倍かの幸いに変つてお母様に訪れる事と信じます 何卒お体を大切にされて下さい 文子にも良く言つて下さい 此の一、二年の躰が最も大切で 精神的の躰です 文子は良く言ふ事を聞く純心な心の持ち主であることは信じて居ります 此れから先の交友関係 読書等良く気を付けて下さい 新聞で読んだ事ではあります 男子の職業の改定と同時に 女子の職業戦線の要求の増大と言ふ事は必然です がいらずに就職を急ぐ事なく学校は完全に卒業する様に努めて下さい 要するに御国の戦争と同様我が家も此の二三年が決戦期です どのような苦勞しても最后迄頑張り抜きましよう

種々書いてしまつて解り憎い事と思ひますが服装検査後の暇をみてお便りを書いて居ります

同居の諸君にも宜しく 昭和十八年九月二十五日

(第二信) 満洲国牡丹江東寧から。

日附は書いてありません 拜啓向寒の折 其の後お変りはありませんか 出発に際しましては忙しい連続でさぞお母様もお疲れの事と存じます 以前より覚悟はされて居た事とは存じますが 当分寂しい事御苦勞の増す事お年寄りのお母様に本當に御気の毒と存じますが 戦争の終る迄私の帰る迄は御身体に気を付けられて下さい

いまし何時か親子三人水入らず 楽しい日を迎える為前線銃後共に頑張りませう 私は出発以来至極元気 長い日も数も軽快に無事表記部隊に到着しました 当地は北支と違つた気候風景があります 丁度内地の高原を思はせませう あたり一帯黄色くなつた冬枯れの様な山々ばかりです

文字は如何ですか 近頃はお友達の家で長話をして居る様な事はありませんか 座る時はきちんと座つて居ますか 居ましたら手紙を渡して下さい 文字 丈夫な身体で元気に通学しているかね 余り勉強し過ぎてはいけないお前は余り丈夫な身体ではないからね 丈夫な身体を作る事が一番大切なのだよ お国の為になる事で自分も一番幸福な生活が出来るのだ解かるね お前は兄サンが葉ばかり飲んで居ると云つて良く笑つて居たが 家に居る時身体に気を付けて居た為と思う 現在多忙な軍務も至極元気でお務めしている これからはお前が僕に變つてお母様の

お手伝と わかもと カルシウム ビタミン球を飲む様 兄さんの留守中お前が弱くてお手伝いどころか お母様のお世話に成る様な事があつたり 近所の人から後指をさされる様な間違を起す様な事は其れは罪悪です 神様や仏様はきつとお母様もお前も一生不幸な生活をあたえるでしょう 先づ健康そしてお母様の言うこと兄さんの言う事良く実行して率先お母様のお手伝いをする様 口下手の兄サンが手紙で呉々もお頼みます

それから何時か約束して居いた絵を送つて呉れないかと云つても忘れて居るだらう美人画だ 一生懸命書いて送つて呉れ 今僕の膝の上に真黒な猫が居るんだよ お腹をこわして居てきたないのだがお前等が猫を可愛がっていたのを想い出して煙草が吸いたいのだが手が届かない動くのが可愛想で我慢して手紙を書き続けて居るのだ 兄サンの手紙は何時もつまらないだらうがお前の事を心配するからなのだ ね 良く解つておくれ では 教ちゃん1 日出ちゃん2 悦ちゃん3 村野さん4 千代さん5 隣の工場の人6 近所の人 其れから知らない人にも宜しく言つておいて呉れ 手紙数に限りがあるので お手紙があげられないからね 左様奈良 文子 兄より (注)1・4は幼友達クラスメイト。5は隣家のお姉さん。6は我が家の隣に海軍さんのカッパ工場があり女子工員さん達でした。(以下 14頁へ)

ウオッセ島の最新情報

開発開始 ハイスクール建設中

元八〇二空の山下治氏(本会会友)から本会の秋本常任幹事に、最近のウオッセ島の状況について次のお手紙をいただきました。

拝啓、その後、益々ご壮健にてご活躍中のことと存じますが如何ですか? 私、昨 11・17 日次の様なことで横浜まで往復しました。車窓に映えた富士の山頂には白い雪もあり、冬近しの思いと夏以来気懸かりであったウオッセ島のジュラルミン慰霊碑の事等を含め、御無音のお詫びも兼ね合わせペンを執りました。

既にご承知かと存じますがマーシャル諸島共和国、マジュロ島に六年間余、滞在しておりましたフリーカメラマンの島田興生さんご夫妻が 9 月 28 日現地から帰国されました。

帰国に当り私共ウオッセ関係者へのご配慮で、8・15〜8・20 の間ウ島に宿泊し、島内各地を踏破し戦跡をビデオに 3 時間余記録して来られ、その鑑賞会を 8 0 2 空大隊長だった永尾直孝(83 才)様宅で催され、5 3 1 空篠崎さんと 8 0 2 空関係 6 名が往時を偲び観ることが出来ました。

ウ島開発は徐々に進んでおり政府立ハイスクール(高校)を建設中(今迄

マーシャルの公立高校はマジュロとヤルートの 2 校のみ)で、この学校はマーシャル北地域を対象(マーシャル全域の人口約 4 万、内 2 万がマジュロ居住、ウオッセ四・五百人余、子供全人口の 3 との由)建設場所は 3 トーチカと 2 砲台の中間にあった弾薬庫、魚雷庫の南、旧農園北付近。(前回訪島時の写真中、3 トーチカと弾薬庫の中間の建物は診療所と存じますが、島田さんには確認してない)。

ビデオには 8 0 2 空関係の飛行艇棧橋、水上戦闘指揮所(通信科倉庫)、航空隊本部、電信室内部(司令以下終焉の地)無線、マスト残骸、水槽タンクのトーチカ群を始め、私が記憶にある第 3 トーチカ、第 4 トーチカ、第 2 砲台、第 3 砲台、送信所跡、2 次蓄電池鉛電極板、昭福丸、豊津丸の両碑、ウ島最南端の探照灯跡等が見えます。

私達(参観者 7 名)未知の内陸部付近にある大きな廊下式半地下壕で島田さんの話では優に一千名以上が入れるもので、天井からの垂れ水で所々の床には水溜まりとなっており真っ暗、一か所に人骨あり、入口は何処か判然としないが入口かと思われる壁面に、朝鮮設営隊員が 1 9 4 5・11・10 の日付、氏名とウ島離別に当たったの漢詩が茶褐色の塗料で書いてある。(漢詩は写真に拡大して島田さんが所持)。

あったものと考えられる。

テープの各砲台には砲身もあり島田さんの言葉では「ウオッセ島の遺物はマーシャルの戦跡中、最高の数」とのことです。又この一部を観光目的に保存したい、という現地人も居るようですが? とのことです。

私達の懸念事項である遺骨について前期地下壕の他に二ヶ所あり、その一ヶ所は日本語を話す島民の Napitini Lab(ナプタリ、ラバレル)さん(64 歳)の家屋の前の、墓標に置いてある岩石の下にもありまして発掘状況も記録されていました。また、もう一ヶ所は Lokvor Marshall(ロクオール・マーシャルさん(26 歳)宅にあります。島田さんは、来春厚生省主催の慰霊巡拝団が来島するから、それ迄保管方を依頼されたそうです。

何れにしても貴兄の兄が埋葬されている第 2 砲台付近の近景がテープにあり、出来れば遺族会名でも個人名でも良いと存じますが、島田さんと早急にご調整してご覧下さい。

ジュラルミンの慰霊碑について参観者全員に略図上で位置を確認しましたが、建立の事実は一致しても場所については、まちまちで確認出来ませんでした。一部の人は「46 年の風化で無くなっていくだろう」との意見もありました。

明後日の 20 日、名古屋で 5 3 1 空の中京地区関係者 10 名位と、篠崎さんが

会合する予定で私も招かれ参加します。その折にも伺ってみます。

ご期待に答えられなく申し訳ありません。私の記憶している場所については何れお会いした折、申し上げます。

① 建設中のハイスクールの位置は先年迄、台湾の支援で農場開発が進められていたが中国との友好提携で台湾側要人が心証をこわし、開発途中で全員引揚げたため学校用地に転用した、とのお話です。

② ウオッセ環礁の南にあるエリクツプ環礁の一小島は海鳥の生息地で軍艦鳥(羽を開くと 1 米以上もある)とか、海鳥多数が乱舞している画面もあります。

③ 飛行艇棧橋先端、(岸から割に近い)、沖水深 30 m 位に日本双発が沈んでいる。尾翼の形から日本軍機との事。

以上、取り急ぎ下書きなして申し上げますが、ご判読下さい。向寒の砌、ご自愛專一に頑張ってください。

山下 治
不備

文中の、御遺骨のことにつきまして、厚生省援護局主管課に報告し、善処されますようお願いいたしました。

平成四年の現地慰霊に同島は含まれません、次の機会には千島ヶ淵墓苑にお迎えることと存じます。

兼高かおる



本稿は、週刊新潮3年11月7日号より転載させて頂きました。

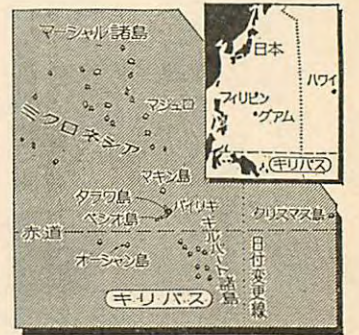
憩いの地に太平洋のタラワを選んだと聞いて、おやつと思われる方々は今どのくらいいらっしゃるでしょうか。私のまわりでは、ほとんどの人たちがその名を聞いてもきょとんとして、そこは何なのという調子です。時代は流れていったのですね。

マキン、タラワは第二次世界大戦中に日本が太平洋の外堀として、強固な要塞を築いた島なのです。百万の兵が百年掛かっても陥落しない、と日本側は豪語し、アメリカも太平洋において連合軍が進攻した島のなかで最も厳重に防衛されていた島と認めた所です。でも、日本軍は玉砕しました。昭和十八年十一月二十五日のことでした。当時、英国領ギルバート諸島だったこれらの島を日本軍はパール・ハーヴァー攻撃後すぐ、占領していたのです。ギルバート諸島に行ってみなかったのは、私が南太平洋のソロモンを取材

憩いの地

連載 20

キリバス



した時、オーストラリア人がギルバート諸島の原住民の作った貝のネックレスをプレゼントしてくれたからでした。結婚の時に身につけるそうで、山の色の異なる貝を小さく円盤状に削り、繋ぎ合わせたものです。それはそれは手のこんだもので、作るのにかなりの月日と労力がかかったに違いありません。こんなに努力をして、こんな手のこんだものを作る島の人たちの生活を見たいと思っていたのです。

ようやくチャンスが訪れてギルバート諸島に行けるようになったころ、島は独立国となり、その名はキリバス共和国と改められていました。ギルバートの発音が訛ってキリバスになったそうです。

この辺りの島々へ行くには、運良くそこへ行く飛行機がたまたま運航していたというチャンスに出会わなければいけない時代でした。私はマーシャル群島のマジュロから飛びました。余談ですが、マーシャルには私の島、カオル・

マ字でサンメと書いてレストランでは人気のある食べ物でした。マーシャルから南に一時間ほど飛ぶとタラワです。空から見たタラワはコバルト色の海にV字を左に倒した形の細い真っ白な島でした。まばゆいばかりに美しい海と島、ここで砲弾がとびかい、海や島を血で染めたとは、悪夢としか思えません。

バイリキ国際空港に着くと、ターミナルは鉄筋コンクリート造りではなく、現地風の建物で、風通しがよく、こういう土地に適していたものでした。飛行機が着く時は何となく人が集まってくる。ベンチでかなり太めの女性が寝そべっていたり、大あぐらをかいてタバコを巻いている小錦ばりのおじさんや長い黒髪をほだいては巻き上げている暁閑を女にしたようなおばさんなどがいます。どの人もおっとりとしています。

国旗は波の上に朝日が昇り、海上に軍艦鳥が飛んでいるといったマンガタ

ニックなデザインですが、意味はあります。軍艦鳥は個性と力と美を、朝日は赤道の太陽を、海は太平洋で三つになっているのは国内の各諸島群を表しているのだそうです。

まずは島唯一のオシンタイ・ホテルに向かいました。一本道でラグーン(珊瑚礁)に沿って走っています。オシンタイ・ホテルはラグーン側に面していて、二階建ての部分と平屋の部分がありました。私は部屋と海との間に木陰とベンチのある一階建ての方に部屋をとりました。ベンチにすわって遠浅の海を見ていると、海風が優しく髪を撫でてくれます。美しい夕日がオレンジ色がかった金色のきらめくような光を、水平線から空いっぱいひろげました。なんと美しい光景でしょう。海もオレンジ色に輝いています。

でも、このホテルの名のオシンタイの意味は日の出です。国旗にちなんでしょう。ですが、私はサンセット・ヴェーとか、イヴニング・グロウの名の方がびったりだと思いました。

島を見るにはレンタカーを利用します。道路脇にガソリンと書いた掘立小屋に行くと、かわいらしい女の子がバケツに入ったガソリンをカーまで持ってきて漏斗に入れてくれました。この島でバイクに乗ることは大変ありがたいことらしく、我こそは島一番のダンディといったモダン・ボーイが濃いカラーグラスをかけ肩からバッグを下

げ、足元は裸足といった出で立ちで颯爽とバイクをとばしていました。島が排気ガス公害に悩まされるのも遠い将来ではなさそうです。

島民はミクロネシア人が九六%、ポリネシア人が少々です。彼らはでっぶりとしています。自転車が少ないのは、もしかしら彼らの重みでタイヤがすぐパンクしてしまふからかもしれません。また、彼らを見て気がつくのは、けっしてうす汚れたものを身につけず、いつもこざれいにしていくことです。男はラバードという腰巻き一つで、大抵は裸足です。健康的だと私は思いません。漁業大臣がホテルを訪ねて来てくれた時も裸足でした。大臣はきれいな英語を話し、親切にいろいろな動いてくれた方でした。女性は長めのワンピースを着ています。でも座る時はあぐらをかきます。

◇

島民の生活を見たくて公務員のベレさんの家を訪ねてみました。家は高床で壁はなく、柱と屋根だけです。雨が吹き込むような時にはヤシの葉で編んだスクリーンを吊るして防ぎますが、普通は壁など無い方が風通しよく四方が見えて広々として、気持ちがいいのです。こうした南洋の島々では建築材料はほとんどその島で産出するものでまかないますから、高床にする土台は石、丸太はパンダナスの木、床はヤシの葉の柄を開いたものが敷かれています。

した。ヤシの葉の床は足ざわりもさっぱりしています。

庭で六十歳の母親がすわりこんでパンダナスの葉を叩いています。キリバス国の西端の島オーシャン島（今はバナバ島と名が変わりました）から持ってきた鍾乳石を地面におき、叩く棒は重くて堅いアイアン・トゥリーです。パンダナスの葉は叩いてしなやかにしてから敷物のマットを織るので、嫁はあんな重いものをもって叩くのは大変だと言った嫌な顔をしています。こんな島まで若い女性が労働を厭うようになったとは！ 屋根用のヤシの葉は枯れて落ちたのを水に漬けておき、しなやかになったところで編むと二、三年はもつそうです。

木陰では若い娘たちがあぐらをかいて車座になってランプをしています。家の日陰で父親の指図で若者たちがカヌー作りをしています。昔は釘などありません。ヤシの繊維で結んだり、マンゴローヴから糊をとり、板を張りつけて作ったそうです。父親はその方法を若者たちに教えていたので、のんびりしているように見えた作業は、もしかすると糊で板が固定するまで待っていたのかもしれない。完成は三週間くらい後だそうです。もう一軒の家に行ってみると、妻が庭先で料理をしていました。ココナッツ・ミルクで貝を煮ています。主食はタロ芋です。すべてこの土地で賄えるもので

す。

キリバスが独立したのは一九七九年。英国はこの国が一人歩き出来るよう期限つきで予算援助をしました。独立はいいけれど国を経営していくのは大変なことでした。以前、海の男として名を馳せたギルバートの男たちは、外国の漁船に雇われていました。国の財政にとって、その送金が大きかったので、しかも彼らが不在だったので、食料も島の生産で賄えました。独立して島の人は初めて税金を払うことになりました。収入の五%。でも離島の人は一人二ドルだけです。

英国の援助で野菜島を作ったり、漁業用の餌を養殖したり、きれいな海水を利用して天草の栽培をしたりしています。旧宗主国の英国からやって来ましたが、生白い肌を真っ赤に焼いて指導にあたっていました。根気のある仕事です。オーストラリアから来た青年は豚やニワトリの飼育を教えています。私の心配はこういう事業が根づくのかどうかです。

ドライブしていたら、ある家の垣根にヤシの新しい葉がリボンのようにずらりと結んであるのを見つけました。入ってみるとこの島唯一の芸術家ピーターさんの娘の十七歳の誕生日で、結ばれたヤシはパーティーを開くことを報らせる飾りだったのです。ピーターさんは舞踏家で、離島の少女たちをこ

こに住まわせて踊りを教え、オシントアイで観光客にみせたり、時には外国まで長期出張するのです。

パーティーは午後八時からというので、私はその時間ぴったりに行きました。私はこののんびりした島で時間なぞ存在する管がないことを失念していたのです。もちろん誰も来ていません。何となく集まって来たのは九時半をまわった頃でした。大広間だけの棟には客がただ黙って座っていて飲食物は何も出ません。やがて白髪の方がやおら立ち上がるとお祈りを始め、皆が静かに頭をたれて聞いていました。庭のテーブルに食物が並びましたが、ごはん、パンの実、タロ芋に缶詰のコーンビーフと焼き魚くらいのもので、飲み物は砂糖の入った粉ミルクで酒類は全くありません。

いよいよ踊りが始まりました。楽器は外来のものウクレレとギター、島ものは打楽器で竹を木で激しく叩きまわす。彼女たちキリバス・ガールズの衣裳はパンダナスの葉の腰みとのヤシの実を半分にかットしたお碗みたいなブラジャーでした。冠と貝の腕輪もしています。踊りの真打ちはピーターです。大きくふくらんだ踵まである腰みのウェストより高く左右にはね上がるように振りながら、顔をばっばと上下に動かす生きのいい踊りです。腰みのゆれは大海の波を表しているのだそうです。後で庭においてあったピータ

一の腰みのを着けてみました。何と二十五キロもあるそうで、私は立ち上がることも出来ません。この腰みのは黒い色でした。パンダナスの根を茹で、さびた鉄を湯に入れ、醗酵した酒トデイを入れた液体に葉を三日間漬けておくと黒くなり、それをヤシ油に漬けると長持ちするのだそうです。こういうのを先祖伝来の土地の人の知恵というのでしょう。



日曜日の朝、知り合いになった牧師さんの家に行ってみました。島民はカソリック半分、プロテスタント半分の割合です。こちらはプロテスタントです。礼拝には皆がござっぱりした服装でやってきました。あぐらをかいて座り、神妙な顔つきでバイブルを読んでいます。牧師さんも腰にはラバードを巻いて上着着用です。礼拝後、敷地内の牧師さんの家と呼ばれていくと、ここは葉で編んだ壁があり、キッチンも家の中にありました。海のすぐきわなので、壁がないと涼し過ぎるのだそうです。壁にはチャールズ王子とダイアナ妃の写真が飾ってありました。いまでも英国王家を尊敬しているのです。

上着を脱いで上半身裸になった牧師さんは庭でヤシのトディ作りを見せてくれました。ヤシの新しい葉を切り、そこからじみ出てくる樹液を瓶にためると少し甘い飲み物が採れるのです。どこの家でもヤシの木に瓶がなっているように吊り下げられています。トディは欠かせない飲み物なのです。朝、空き瓶をつけておくと夕暮れには一杯になっています。これを二三日おいて醗酵させると、ヤシ酒になるのです。あまりアルコール分もなく酸っぱい飲み物、サワー・トディになります。島は三・五メートルより高い所はなく、もちろん川もありませんが、一メートルも掘れば水が出るし、雨もふるので水には困っていません。

干潮になった時の遠浅の海は、人の姿が豆つぶに見えるほど遠くまで砂地になってしまっています。その砂地に足を投げ出して座っている人たちがいました。何と座ったまま両手で砂をさぐって貝を拾っているのです。一時間もしないうちにバケツ一杯の貝を拾って、ゆったりと帰っていききました。その後を海の水がひたひたと砂地をおおっていきます。まるで島民のために海が水をどけてあげているかのようです。なんと平和な島でしょうか。

タラワ島は一つの島というより、ある所は満潮になると離れ島になり、干潮だと歩いて行ける島の一かたまりです。日米の激戦となったのは西端のベシオ島で、これも干潮なら砂浜つづきになる所でした。そして、三方は干潮時でも海面から見えない珊瑚礁に囲まれた広い浅瀬です。海から敵が上陸するのは難しい所なのです。面積二平方キロのこの小さな島に日本軍は海岸に沿っていくつものトーチカ、野砲、高角砲を据えつけました。

アメリカ軍は正しい潮汐の状況が不明のまま上陸作戦にふみ切りました。しかし、リーフ上の水深は浅く、上陸用舟艇が乗り越えられず、兵士は深い海に飛び込み、重い装備のために溺れ死んだ者も多かったです。島にいた日本軍も空と海からの攻撃で約五千名のうちほとんどが戦死し、生き残った者も自決したのです。

海辺には大きな大砲が空しく海に砲身を向けています。分厚い鉄で造られた大砲なのに朽ちて折れているのもあります。大砲には文字がくつきりと刻まれています。『日本製鋼所 明治四十四年四十五口径 八インチ砲』。不思議なのは『英国 アームストロング 四一四四〇ポンド』などと印されているものもあつたことです。海の中にはアメリカの上陸用舟艇が赤く錆び、朽ち果てた姿が波に洗われていました。

私は世界の戦場を見て歩きました。紀元前から中世、第一次、第二次大戦と多くの人たちが個人の憎しみもないのに殺し合った跡を。何とかストップさせる手立てはないものかと、私は真剣に考えています。

ホテルに戻ると食堂にドラムやベアスが運びこまれ、天井から色とりどりの紙が飾りつけてありました。今日は金曜日、週給は入ったし明日は休日というわけで、今夜は思いっきり酒を飲んで楽しむというのです。夕暮れあたりからバーで大男たちがビールを呑み始めました。声もだんだん大きくなってきます。バンドも負けじと大音響です。私は大きな声や音は苦手ですので部屋に戻りました。

◇

月が海を照らしていて明るい夜でした。ふと馬鹿馬鹿しいことを考えてしまいました。キリバスは東西に長い国なのです。西端はベレさんの母親が使っていた鍾乳石の採れるオーシャン島から東端は三千八百七十キロも離れたクリスマス島。その間に日付変更線があるのです。今夜はタラワが金曜日、明日はクリスマス島が金曜日、急いで行けば週末が三日になるのではないかと。また、この国は赤道もまたいでいるのです。タラワは北緯一度三十分だけ、南のキングスミル諸島は赤道の南、南緯一度くらいにあります。こんな国は他にはありません。

いつしか大音響がやみ、波の音が心地よく聞こえてきました。青い海、白い砂、軽やかな風、タラワの自然はかつての激戦を忘れたかのように、あくまでやさしく包んでくれます。ただし、私が求めた貝のネットワークは、残念ながらこの島では誰も作っていませんでした。

☆

☆

杵き雲の下で (一)

戦いの記録 II

会友 平林 和夫

これはマロエラップ島から生還された平林和夫様他二名の方々が発行された「杵き雲の下で」から抜粋したものです。(点線部分は一部割愛したものです)

概要 中部太平洋南洋群島、マーシャル諸島、マロエラップ島
昭和十九年一月三十日、同三十一日
第二五二海軍航空隊
在島部隊

- 第二五二海軍航空隊の主力 (本隊・約九百名)
- 第六三警備隊・約一千百名
- 第七五二海軍航空隊派遣隊・約五十名
- 第四海軍施設部・マロエラップ派遣隊・約五百五十名
- 第十六海軍軍用郵便所派遣員・約二十五名
- 第四海軍軍需部派遣員・約二十五名
- 第一〇四海軍航空廠タロア分工場・約百二十名
- 横須賀海軍工廠派遣員・約八名
- 陸軍海上機動第一旅団佐藤隊・約二百十名
- 同右・中西隊 約二百名
- 総員 約三千三百名
- 昭和十八年十月調・三千三百二十九名

航空兵力

零式戦闘機

約三十機

一式陸攻機

五機

輸送機

二機

基地兵装 (主として警備隊に)

高角砲

二連装十二・八種

平射砲

十五門

同

十二門

機銃

(内、一門は離島) 二十五ミリ 四機

同

十三門 二十五機

電波探知機

二台

探照灯

三台

大発

三隻

付属監視艇

六隻

(小銃、機銃、防毒面等の隨身兵器

類は省略)

「第二五二空」の誕生

私の居た第二五二海軍航空隊は昭和十七年九月二十日、千葉県木更津基地で元山海軍航空隊から戦闘機隊を分離独立編成になり開隊。直ちに第二十二航空戦隊に入り、十一月九日、南方ラバウルに進出した。司令は海軍中佐、柳村義種 (後・大佐) になられ戦死、海軍少将、長崎県)。副長は海軍少佐、舟木忠夫 (後・中佐) になられ戦死、海軍大佐、熊本県)。海軍航空隊における三桁の数字は、通し番号の数量を現

すものではなくて、三つの符号で隊の種別等を現している。「二・五・二」という符号は、戦闘機隊で、佐世保鎮守府所管、特設航空隊であることを示していた。

任官、配属

私は今次大戦時は大学二年であったが三年になると半年短縮になり、十七年九月に卒業した。在学中に法経関係学生への三つの関門、海軍主計へと、海軍予備学生へと、陸軍経理部への三つとも総てに願書を出したのは、当時の学生として当然の心構えであった。幸いに卒業と同時に私は海軍二年現役の海軍主計見習尉官として海軍軍籍に入り、直ちに東京の海軍経理学校に第九期補修学生として入校した。四ヶ月の特別訓練を受け十八年一月、海軍主計中尉に任官し卒業と同時に (一月三十日) 第二五二海軍航空隊附としてラバウルに赴任した者である。着任した者は同期三名で大坪忠夫 (後主計大尉になり戦死・主計少佐)、磯田哲夫 (後・主計大尉、東京都) と、私であった。三人とも海軍の実務に着くのは元より初めてである。経理学校で同じ部隊に行く者を集められて初めて、「俺と一緒に征く相棒は貴様か」と、お互いに初名乗りの挨拶をしたものであった。さて、私等が遠くラバウルの第二五二海軍航空隊に着任した昭和十八年二月十七日、もう一人、色の黒い目の大きな、やや眼光鋭い兵曹長が同時に着

実戦服務

任した。平川兵曹長 (平川寿夫・後・中尉・福岡県) であった。部隊に着任した時、部隊は丁度、英靈の遺骨送還に当たったの慰霊告別式を行なっていた。第十一航空艦隊司令長官も参っておられた。「着任の日が告別式か」と少々気がしたものであった。ラバウルでは私等が着任して一週間も経たない内に慌ただしい事になった。部隊は既にマーシャル諸島のルオットに転進の内命を受けていて、輸送船二つに転進輸送の準備が急がれていたのだ。

二月下旬、部隊は第五日の丸、鳴戸丸に乗船、途中バラレ、タロアを経て三月三日無事にルオットに入港した。三月から十月迄、二五二空は本隊をルオットに置き大島島、タロア島 (後・マロエラップ島と統一呼称) ・ナウル島に派遣隊が置かれた。ルオットには第四艦隊の下に第十二航空戦隊がありその司令部があった。二五二空は、その麾下に入ったわけである。第二十二航空司令官は吉良俊一海軍少将 (後・中将) で参謀が三・四名おられた。ルオット島には二五二空の他に、第六十一警備隊派遣隊、南東方面航空廠第二支所、第六回航班、第十四魚雷調整班を始め郵便所、軍需部、施設部、港務班の派遣隊、又は派遣員がいた。その総数は約二千九百名になったと思う。(内・軍属・約一千名) (以下次号)

(8 頁より)

(第三信) 南洋からはこの一通だけで、これが最後の便りでした。受取ったのは一九年四月頃で、戦死公報は五月頃と思います。文の中に四〇円同封とありますが、現金は二〇〇円入っていました。

拝啓 御無沙汰致しました
内地は寒い事でせうね 其れとももう暑く成ってしまいましたか
私は寒い東寧を後に現在椰子の木蔭でテクテク踊ると云う歌のある所に居ります

爆弾の外 至極呑気な所です
お母様のお祈りだけでもきつと病氣にもならず決度丈夫で帰ると信じて居て下さい

此の勲章は無くすといけません家の宝に大切に保管して居て下さい
此方は椰子の实の外なにもありません

髭の小父さん達 (僕もそうです)
たまのキヤラメルの配給で大喜びです
苦あれば楽ある今の内大沢 (中国語で (大そうたくさんの意) 苦労して居きたいと思えます
お便りを待ちます
四〇円同封致します宜敷く所置されて下さい

母様

善三郎

タラワに

合気道道場完成

本会会報第五四号 (平成三年二月一日発行) 一八頁掲載の「いま、タラワで合気道」の記事のように合気道道場建設中でしたので、本会は三月一八日に「金五万円」を寄付致しました。

昨年十月、建設が終わり、栗林名誉総領事と、指導者峰岸陸子様から丁寧なお礼状がまいりました。

それによりますと、道場は外海に面している椰子の林を切り開いた三〇〇坪程の土地に、幅一八メートル、奥行き一三メートルで、建坪二三四平方メートル (六五坪)、畳を全面に敷きま

すと一三〇枚敷ける道場になり、天井の中央は、高さが八メートル位。ローカル式のパンダナスの葉で葺いた屋根、柱はコンクリートで、モルタルの壁を周囲腰の高さまで巡らせ、風通しの良さは抜群、波を見ながら稽古ができる贅沢な環境で畳は、全部で七七枚

に増え、一五〇名程の会員が、月曜から日曜まで、熱心に稽古しているとのことです。

峰岸様は、日本政府開発事業団 (ODA) からタラワに派遣され、公務の余暇に島の青少年に合気道を教えており、感謝されています。

合気道を通じて、日本とキリバスの交流の輪が更に更に広がることを期待いたします。

合気道を通じて、日本とキリバスの交流の輪が更に更に広がることを期待いたします。

名簿訂正

◎ 平成 3 年 8 月 15 日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
23	本堂 テフ	戦歿地をクエゼリンに訂正
27	古市 モト	続柄 妻を母に訂正
31	土屋 トミエ	住所を 〒630 札幌市西区福井 3-10-6 に変更
31	長谷部 なを	住所を東松山市元宿 2-16-11 に変更
33	佐野 和子	住所中 富津町を富津市と訂正
38	高橋 かつ江	住所を 〒410-11 裾野市深良 2818-2 TEL 0559-93-9522 に変更
39	林 翠	続柄 弟を兄に訂正
40	谷井 理助	〒184 小金井市貫井北町 1-22-5 TEL 0423-22-3967 谷井隼助 兄 19. 2. 24 ブラウン <新入会>
40	谷井 自助	〒188 田無市芝久保町 3-23-23 TEL 0424-62-1467 谷井隼助 弟 19. 2. 24 ブラウン <新入会>
51	中村 なつ江	死亡の為弟能夫が継承 (同住所)
53	後藤 行雄	戦歿地をクエゼリンに訂正
54	川村 正一	電話を 052-321-2227 に訂正
56	中根 杉子	住所を 〒364 埼玉県北本市下名戸上 1552-2 に変更
59	門脇 をのぶ	死亡のため退会
59	山中 美子	続柄姉を妹に訂正、戦歿地クエゼリンをルオットに訂正
62	矢次 富	死亡のため、妹里子が継承 (同住所)
69	中山 時野	死亡の為、長男正敏が継承 (同住所)
70	植田 静夫	〒861-61 天草郡松島町合津 1581 TEL 0969-56-1332 植田龍雄 兄 19. 2. 6 エビゼ <新入会>
77	志賀 淑雄	〒176 を 179 に訂正

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため
浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

- ◇北海道 伊藤 フジ 白山光枝子
- ◇青森県 本堂 テフ
- ◇宮城県 伊勢 照男 西田 正尚
- ◇秋田県 加藤 カヨ
- ◇福島県 江間正二郎 吉津ミドリ
- ◇群馬県 園部 重太
- ◇千葉県 石川 きみ 金崎 史
- ◇櫻井 一正 山室 敏郎
- ◇東京都 飯島 祐宣 小島八重子
- ◇鳥居ミサヲ 西沢 和子 西田 恒子
- ◇神奈川県 鈴木 リン 田中トメノ
- ◇新潟県 近藤 茂 松岡 イキ
- ◇富山県 松田ふじゐ
- ◇福井県 柳沢 清信
- ◇長野県 綾部はつゑ 神田 環
- ◇高見沢およう
- ◇岐阜県 鳥本みさを
- ◇京都府 寺西 信也
- ◇大阪府 松宮 花子
- ◇岡山県 金子ミサヲ
- ◇広島県 荒谷ミキエ
- ◇山口県 内富ミツヨ
- ◇愛媛県 片上ユキヨ 長岡 俊夫
- ◇三好 邦博
- ◇福岡県 荻野千代子
- ◇佐賀県 坂本 トセ 宮崎 ツヨ

◇長崎県 平田 定

◇熊本県 勝木ユリエ 鬼海 富夫

◇宮崎県 池田 トミ 山内 キク

◇鹿児島県 出花 利文 丸田 キワ

◇沖縄県 島袋 ヒデ

◇会 友 井上 義夫 中島新之丞

以上は平成三年六月一日から、本年十一月三十日までに寄付された方々、四十九名で、その合計金額は一七二、〇〇〇円でした。

「環礁」の座談会の予告

当会は、会員どうしの交流を深める一助として昨年四月に、ブラウン環礁関係者の座談会を催し、55号に発表しましたが、今後次のように逐次行うこととしました。

○平成四年四月 ケゼリン、エビゼ

○平成五年四月 ルオット

○平成六年四月 ウオッゼ、マロエラ

ツブ、ヤルト、ミレ

○平成七年四月 タラワ、マキン

座談会に参加を希望される方は、毎年二月に発行する環礁に同封されている私製はがきの通信欄にその旨を記入

して下さい。座談会の日時、場所等が決定しましたら申込者全員にお知らせします。

○前号「ブラウン座談会」記事中、出席者の中で役員等として、次の方が抜けておりました。追加してお詫びいたします。佐藤会長夫人、昼間、佐竹両常任幹事、昼間常任幹事夫人、黒川幹事、佐久間事務局長、荒木幹事は遺族出席者となっております。

本部だより

☆会費寄付等の納入は―総会当日は受付が混雑しますので、なるべく二月末までに郵便振替でお送り下さいますと大層助かります。

☆会員名簿をお送りしました。

昨年四月の総会で申上げたとおり、会員名簿を作り三年度分の会費を納めた方、全員にお送りしました。

内容をひと通り御覧頂きまして、落丁や乱丁又は記載事項に誤りがありましたら、なるべく早く本部にお知らせ下さい。名簿に記載された住所・氏名・電話等が変わった時は、はがき又は郵便振替用紙の通信欄でお知らせ下さい。名簿の原本を訂正し、会報「環礁」の名簿訂正欄に掲載いたします。

昭和六十三年七月刊行の名簿には、本会の貴重な歴史が、「二十五年の歩み」として記されていますのでこの名簿と併せて保存して下さい。

☆50号から毎回「ブラウン環礁の玉碎」を執筆下さっている矢野雄三様が、昨年十二月初めに、急に入院されて、手術を受けられましたので、今回はお休みにいたしました。

故木下 甫様の御逝去を悼む

御逝去を悼む

本会元篤志会員木下 甫様は長らく療養中のところ昨年六月十三日行年八十二歳を以て逝去されました。

木下様は、昭和十六年九月より十七年十月までケゼリン島で第六根拠地隊司令部参謀として同方面の防備に当り、昭和四十六年以来本会の篤志会員として御協力いただきました。

環礁15号以来六回に亘って「マージナル戦記」を執筆頂き、慰霊祭、直会旅行にも度々参加下さいました。著書に憂国の書「大東亜戦争大勝論」があります。

謹んで御冥福をお祈りいたします。

紅 椿

(タラワ) 千葉県 谷沢 英子

七草の粥の白さに若みどり
草萌え出する春の待たるる
夕映にはのぼのと咲く紅梅の
ゆかしき香り庭にただよう
大雪に折れんばかりの紅椿
赤い花びら見えかくれ咲く
咲いてよし又散るもよし桜花
弥生の空にしばしの爛漫

(1頁より)

乗物 往復とも豪華な大型観光バス
宿泊 神奈川県三浦市小網代
油壺観光ホテル

参加費 小学生以上 二万七千円
バス・宿泊・中食二回を含む

申込 二月末日迄に同封はがきに住所
・氏名・年齢・性別を記入し料
金を添えお申込み下さい。申込
順に受付けてバスの定員に達し
た時締切ります。同室の希望は
できる限り考慮しますので申込
書にお書添え下さい。

一本会が受取った申込みは旅行主催会
社に取りつき、主催会社から申込者全
員に旅行に参加できるか否かを三月末
迄に通知します。

申込み後の取り消し、変更等は速や
かに左記主催会社に通知して下さい。
東京都千代田区大手町一ノ六ノ一
日本通運(株)大手町旅行支店

第四課 桐谷・沖井

電話 03-3210-1159

コース等 総会終了直後の十二時頃、
バスは弁当を積みこんで靖国神社北門
から一路横須賀に向います。

横須賀の記念艦三笠では先ず日本海
海戦の映画を見せて頂き、係員の丁寧
な説明を聞き乍ら艦内を隈なく拝観し
ます。今年から教科書に東郷元帥が復
活しますので、正しい日本歴史を復習
するのも意義深いことと思えます。

へ花は衣笠春の山 三浦男の夢模様
横須賀音頭は昭和初期の当地を沸かせ
ました。この港から船出した勇士達の
胸にその旋律と情緒は長く長く残った
ことでしょう。

ホテルのある油壺は、三浦半島の西
側南部、相模湾に面したリアス式海岸
の景勝地。鎌倉時代まで四百年以上栄
えた三浦氏は永正十三年に小田原北条
氏に攻められ新井城は落城、一族は全
滅した。近くに城主三浦道守と子息義
意の墓があります。



鎌倉八幡宮は鎌倉を代表する神社
で、康平六年源頼義が京都石清水八幡
宮を勧請して建立したのが起りです。

近くに、後醍醐天皇の第二皇子、大
塔宮護良親王を祀った鎌倉宮がありま
す。

長谷観音は、坂東観音霊場四番札所
で、天平八年徳道上人の創建と伝えら
れ、本尊の十一面観世音菩薩は、九・
一八米で、木像では日本一という。
鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は
美男におはす夏木立かな

と与謝野晶子が詠った露座の大仏は、

謹 賀 新 年

平成 四 年 元 旦

◎ 本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	篤志会員	石井清
相談役	大給湛子	同	土屋太郎
会長	佐藤宗丕	同	徳原徳子
常任幹事	秋本英郎	同	長谷川栄次
同	佐竹エス	同	長谷川敏
同	昼間楽平	同	浜松恒雄
同	荒木常子	同	本埜和昭
同	石谷典夫	同	松平永芳
同	黒川誠	同	村瀬松雄
同	高林芳夫	同	森山喜久雄
同	山口良二	同	山村要
同	柴崎晃	同	横溝幸四郎
同	高橋鎮夫	同	

高徳院の本尊で、古都鎌倉のシンボ
ル。安らかな表情に限りなく人間的な
親しみが湧く。高さ11米余。
二日目の中食は江の島の「貝作」に
魚料理を用意しました。

江の島神社は、安芸の宮島、近江の
竹生島と共に日本三弁天の一つです。
へ真白き富士の嶺 緑の江の島

この海に沈んだ豆子開成中学の十二
人の雄々しき御霊の御冥福をお祈りし
て、大船駅を経由し帰路につきます。

東京駅着は午後五時半の見込みです
が、車の渋滞を考え、一時間位の余裕
をみておいて下さい。

本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町

一八八二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会

電話 〇三―三六六一―八七六〇

FAX 〇三―三六六一―六二四一